

# 第1幕 九州の山紀行 (多氏と海人の足跡)

“アソ、シオタ、イズミ、蛇の子、鹿の子”



阿蘇市永草から見る杵島岳 阿蘇の開拓神、健磐龍命は神八井耳命の御子神。  
『杵島唱歌』 “あられふる杵島が岳を峻しみと、草採りかねて、妹が手を執る”

## 杵島岳 (阿蘇) と 杵島山 (佐賀県杵島郡)

阿蘇市永草から晴れた日には本当にすがすがしい杵島岳 (阿蘇五岳のひとつ) を米塚越しに眺めることができます。

神八井耳命の子孫、建借間命の軍勢が、故郷杵島山の歌『杵島唱歌 (きしまのうたぶり)』を七日七夜歌い、賊を油断させ、いつきに滅ぼしたと【常陸国風土記】にあります。

この故郷杵島山とは肥前 (佐賀県杵島郡) の杵島山のことともいわれていますが、肥前も肥後も同じ火の国です。水俣出身の民族学者、谷川健一氏はこの記事について、神八井耳命を祖とする多氏の一族が九州の地から常陸国鹿島へと遠征・移住した痕跡をしめす伝承であると述べています。

肥前杵島山の西南の麓には塩田という地名があり、有明海に注ぐ塩田川がながれています。この川は、古、“潮高満川”と呼ばれていたと【肥前国風土記】にあり、塩田の地名はこれほど古いものです。この土地には二つの子授かり伝承が伝わ

っています。

ひとつめの話は、塩田郷の村に喜左衛門という貧しい百姓が住んでいました。

夫婦の中に子供がないのを悲しんで、初岳の大神に願掛けをしたところ、二十一日目の満願の日に“今日の帰り道に最初に足にさわったものを拾い上げて子にするがよい”との御告げがあった。喜んで帰る途中、小さな蛇が足にさわった。驚きながらも神の教えだから連れて帰って大切に愛育すると、四・五年後には一丈四五尺にもなった。そうして親の後からどこへでもついて行くので、村人も恐ろしがつて喜左衛門とはつき合わなくなつた。せつかくわが子として育てたけれども、あのとおり村で怖がるから、何処へなりとも身を隠してくれと夫婦がいうと、大蛇はよく聴きわけて、別れを惜しみつつ出て行った。それから十何年かの後、二人は年老いて働く力がなく、いよいよ貧しくなつて困っていると、ちょうどその頃、塩田川の水を引く井手が破損して何度修理してもまた崩れ、村人は大いに困った。村々の庄屋が心痛して易者に占つてもらうと、これは以前人に養われて

いた大蛇の仕業であるとのことであった。蛇を子としていたのは喜左衛門の家より他はなかったもので、一同は話し合って毎年村々から少しづつ井手米を集めてこの老人の家にやることにすると、その後は井手も崩れず豊作が続いたということです（柳田国男・桃太郎の誕生）。

二つめの話は杵島山に福泉寺という薬師如来を本尊とする真言宗の山寺があり、塩田郷の大黒丸夫婦が子授けを祈願していました。ある時、堂の裏で赤子の泣く声がしたので、僧が行って見ると、鹿が人の子を産んで乳(ちち)を与へていた。この子は大黒丸夫婦に引取って育てられ、お許丸と名づけられたが、宮廷に仕えて和泉式部となり、紫式部・清少納言・赤染衛門とならんで平安の歴史を飾る存在となった。彼女は鹿の子であったので、生れながらに足の指が二つに割れていたそれを隠すために母は足袋を發明して娘にはかせたといひます（柳田国男・和泉式部の足袋）。

写真と文責  
牛島 稔大



聖岳（佐賀県杵島郡大町町）より見た杵島山稜

神八井耳命は神武天皇の次男で多氏の祖の他にも、火君、大分の君、阿蘇の君、筑紫三家（みやけ）の連、小子部連、坂井部連、雀部臣、雀部造、小長谷造、都祁直、伊予国造、科野国造、陸奥の石城国造、常道（ひたち）の仲国造、長狭国造、伊勢の船木直、尾張の丹羽臣、島田臣らの祖であるとされている。



和泉式部公園（嬉野市塩田町）から見た杵島山稜

和泉式部は遂に故郷へは一度も帰る機会はなかったが、塩田郷の大黒丸養父母のことは一時も忘れることなく、望郷の念は募るばかりであった。その心情を ” ふるさとに帰る衣の色くちて 錦の浦や杵島なるらん ” と詠いあげた。

## 第2幕 九州の山紀行 (多氏と海人の足跡)

“アソ、シオタ、イズミ、蛇の子、鹿の子”



三秀台（宮崎県西臼杵郡高千穂町五ヶ所高原）より見る祖母山

森にはニホンカモシカ（特別天然記念物）、シカ、イノシシ、ヤマネ、清流にはエノハ（ヤマメ、アマゴ）が生息する。周辺には鉱物資源も豊富で尾平、木浦、見立、土呂久などの鉱山があった（アソ、アソウとは鉱物地名）。また、祖母山の麓、竹田市、豊後大野市、高千穂町、高森町はいずれも湧水（白水：しろうず、はくすい=泉）豊かな里である。

### 祖母山（大分県豊後大野市）

肥後（熊本県）、豊後（大分県）、日向（宮崎県）の境に聳え立つ祖母山の神を姫岳大明神といいます。この姫岳大明神は鶴戸の窟の神鵜鷲草葺不合尊の第四皇子神武天皇の祖母、豊玉姫命であるという説が山名の由来とされています。

姥が岳（祖母山）のふもとの大分県竹田市神原には洞穴があつて姥岳神が祀られています。近くに白水（しろうず）の地名と穴森社があり祭神は蛇神です。その隣が緒方三郎惟義（榮）の拠点、豊後大野市緒方町ですが、緒方町も阿蘇氏の最初の根拠地である熊本県阿蘇郡高森町草部も高千穂とともに祖母山を中心に半径三十kmに全て収まる地理内にあります。谷川健一氏は、“豊後と肥後（阿蘇）と日向の境の地の姫岳伝説に、倭の水人の後裔である緒方一族の蛇の鱗の伝承を付け足して、それが多氏一族によって信濃に持ち込まれ、小泉小太郎伝説となった。”と述べています。

● 姫岳伝説【平家物語】【大神氏系図】  
豊後（或いは日向）の塩田大夫の娘の元に通う謎の男、その正体を知ろうと、

針に長い糸をつけて男の衣服に刺しておくと、その糸の先は姥岳の岩屋にとどいていた。岩屋の中の大蛇が男の正体で姫岳（高千穂）大明神。生まれた男の子は偉丈夫で、アカガリ太夫とよばれた。

● 倭の水人の伝承【魏志倭人伝】  
倭の水人は体に蛇の入墨をしていた。

宗像は胸の部分に、尾形は尻の部分に蛇の入墨をしていたことから起こった名である（金閨丈夫の説）。対馬の豊玉村の仁位に鎮座するわたづみ神社（安曇磯良の墓と称するもの有）の祀管の長岡家は安曇氏の系統の家柄とされるが、代々身に鱗のある人間が生まれるという。

● 信濃のアソ郷【和名抄】  
信濃国小県郡安宗郷（『地名辞書』今の東塩田村、西塩田村、別所村及び富士山村にあたる総名塩田原ともいう、東塩田に古安會の地名残る）。

● 信濃の安曇氏（倭の水人の末裔）  
長野県の南安曇郡穂高町の穂高神社は、海神穂高見命を安曇氏が奉斎した神社。神官は二十一日間の水垢離をして、穂高岳に登り蛇を見つけて、盛大な祭典をいとなむ。そして、氏子にはかならず、脇



神鶴驚草葺不合尊を祀る鶴戸神宮  
(宮崎県日南市)

竜宮で海神の娘（豊玉姫）と結婚した山幸彦が地上の国に戻ると、臨月の豊玉姫も山幸彦を追いかけて浜辺の産屋で神鶴驚草葺不合尊を出産した。山幸彦が覗くと姫の姿は竜蛇であった。



大山祇神社（愛媛県今治市）

伊予の伝承【予章記】

河野通清（伊予権介。瀬戸内海に強大な水軍力を持つ）は大蛇と人間の女の中に生まれ、その顔面と両脇に鱗があった。惟義（榮）と同じ時代に活躍。



健男社（緒方町上畑）

御神木は直径1mほどのカゴノキの巨木（鹿子の木：鹿の子模様の樹皮にちなむが、蛇の鱗模様にも似る）。



アカガリ太夫の母を祀る宇田姫社  
(豊後大野市清川村宇田)

岩屋は穴森社に通じるという。ここにもカゴノキの社叢がある。

● 信濃の姥ヶ岳伝承・小泉小太郎伝説  
【柳田國男『桃太郎の誕生』】  
小泉西塩田村の山頂に寺があった。そこに毎夜美しい女が通ってくる。その正体を知らうとして、針に長い糸をつけて女の衣服に刺しておく、その糸の先は産川の宿屋にとどいていた。女は大蛇であつて、赤子を産んで自分は死んだ。大蛇の産み落とした子供は、下流の泉田村大字小泉の老婆に拾われ育てられ、その名を小泉小太郎と呼ばれた。小太郎は小男であつたが、十六の時大変な力を見せた。小太郎の子孫は代々横腹に蛇の斑紋があるということです。

写真と文責  
牛島 稔大



原尻の滝と緒方社（豊後大野市緒方町）

尾方三郎惟義（榮）はアカガリ太夫の子孫で、身に蛇の尾の形と鱗があれば、尾形という。惟榮は壇ノ浦の戦いとき宇佐八幡宮に火を放ち、また、義経の九州亡命を船を出して迎え入れようとしたかどで咎めを受け、上州利根郡に流された。



藤原純友の根拠地豊予諸島を望む（愛媛県宇和島市）

緒方三郎惟義（榮）の先祖にアカガリ太夫とよばれた大神惟基がいる。惟基は海賊の棟梁として有名な藤原純友の副大将であり、佐伯を根拠地として東九州の水軍を率いた。天慶四年純友が捕らえられたその年に、大神惟基もつかまつた。

## 第3幕 九州の山紀行 (多氏と海人の足跡)

“アソ、シオタ、イズミ、蛇の子、鹿の子”



開闢岳（鹿児島県指宿市）

(本文からの続き) 天智帝は故郷開闢岳に帰された大宮姫を慕い、潜行して開闢岳の麓にあった京殿 (いまの京田) に入って姫と共に三八年間暮したが、慶雲三 (706) 年七九歳で崩御し、また姫も翌慶雲四年五九歳で薨去されたということです。

### 鹿児島 開闢岳 (宮崎県諸県郡・鹿児島県指宿市)

日本書紀(『紀』)の一説によると、日向の諸県君牛(諸井)は朝廷に仕えていたが、年老いたので日向に帰っていた。しかし、娘の髪長媛を朝廷にたてまつろうとして、播磨まで行った。ちようどそのとき、ホムタ別(応神天皇)は淡路島で狩りをしていた。すると数十の麋鹿が海に浮かんで来て、播磨の鹿子水門に入った。使いをだして見させると、角をつけた鹿の皮をきた人間だった。「誰人ぞ」というと、諸県君牛で、娘の髪長媛をつけて来たと言ったという。

“女のほうか男の居住地へ移って結婚するときに、鹿に仮装する風習があったのだろうか。”と考古学者の森浩一氏はこの逸話を評していますが、諸県君牛は海人族の首長で鹿をトーテムとしていたのではないかと想像されます。例えば、福岡の志賀島は海人族の阿曇(あづみ)氏が本拠地としていたところですが、志賀海(しかうみ)神社に祖神「綿津見(わたつみ)神」が祭られています。ここには鹿の角を一万本以上奉納した鹿角堂が

あります。また、瀬戸内海の安芸の宮島には海人族の宗像三女神(市杵島姫命、田心姫命、湍津姫命)を祀る厳島神社があります。この島も鹿で有名です。

先ほどの『紀』の一説には続きがあつて、「天皇、悦びて、即ち喚して御船に従へまつらしむ。是を以て、時人、其の岸に著きし処をなづけて、鹿子水門と日ふ。凡そ水手(水夫)を鹿子と日ふこと、蓋し始めて是の時に起れりといふ」とあり、このことは『鹿児島』の地名とも関係しているかもしれません。

開闢岳の伝承に、塩土翁(一説では開闢僧瑞応院主)が密法修業中、牝鹿が来て法水(閻伽の水)をなめ、口から一女子を産んだとあります。この娘は容姿端麗だったので、瑞照姫と名付けて沙門智通に与えた。美貌が都に聞こえ、上京して藤原鎌足に育てられ、長じて大宮姫と改め、一三歳で天智帝の皇后となった。ところが、正月二日の初雪の雪合戦のとき、姫の足の爪が鹿の爪とわかり、開闢岳に帰されたということです。

#### 参考文献

1、谷川健一『日本の地名』



薩摩一宮枚間(ひらきき)神社

南薩地方一帯の開拓の祖神、特に航海安全、漁業守護の神として舟人等から厚く信仰される。島津家に入貢する琉球人等は航海中開聞岳の雄姿を遥かに拝するや神酒を奉り無事を祈った。瑞応院：開聞神宮の別当寺。本尊は聖観音阿弥陀薬師、開山は真言五祖の一人智通僧正。大化五年(649)の春開聞岳麓に梵宇を構え白雉三年(652)今の地に寺院建立。



宗像大社(福岡県宗像市)

柳田國男の記す「髪長姫」は天武天皇(大海人皇子)の後となった処女の物語で海人の娘となっている。この御后は高市皇子の母、尼子娘(あまこいらつめ)かもしれない。彼女の父は胸形君徳善である。「(尼)は伊勢神宮の忌詞で「女髪長」と言い換えられる)。宗像大社は「裏伊勢」とも称せられ皇室をはじめ国民の崇敬も厚い。

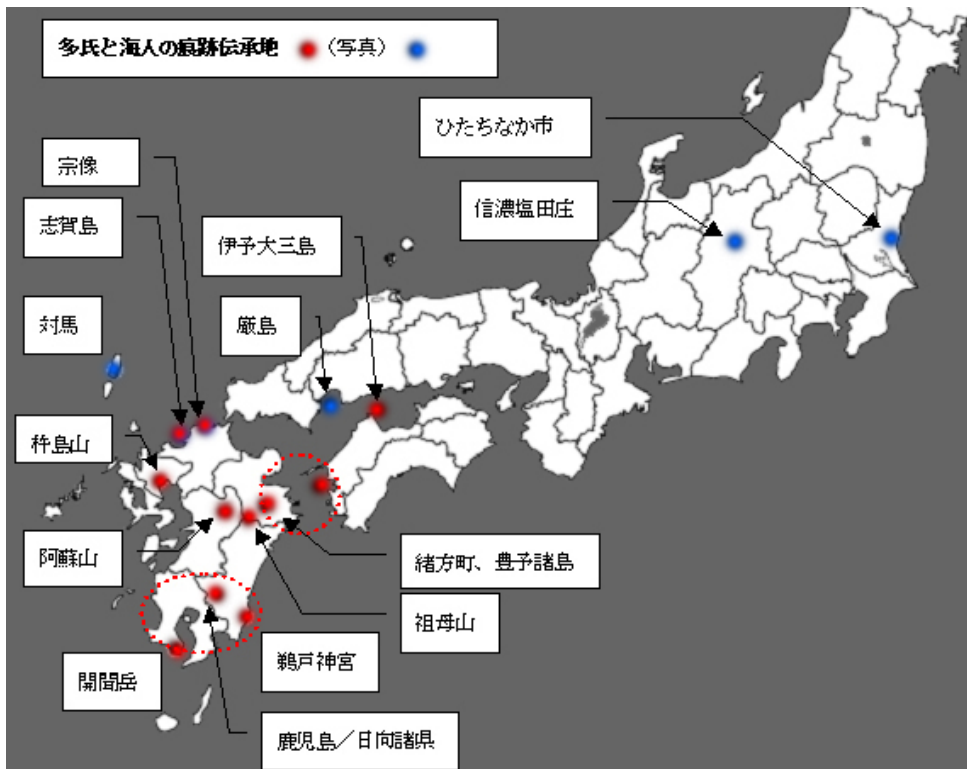
- 2、柳田國男『定本柳田國男集 第8巻』
  - 3、伊藤常足『太宰管内志』
  - 4、天本孝志『九州の山と伝説』
  - 5、梅原猛『海人と天皇』
  - 6、森浩一『記紀の考古学』
- 以上
- “アソ、シオタ、イヅミ、蛇の子、鹿の子” 終り。

写真と文責  
牛島 稔大



志賀海神社(福岡市東区志賀島)

この神社にある鹿角堂は神功皇后が対馬で狩を行い鹿の角を奉納した故事に因むという。



九州の山紀行(多氏と海人の足跡)

『日本』という新しい国号ならびに『天皇』の称号を用い、『日本書紀』、『古事記』の編纂事業を始めたのは、壬申の乱に勝利した天武天皇(大海人皇子)とされます。それまでの『倭国』は朝鮮半島との密接なる連携国家であった。しかし『白村江』での敗戦によって同盟国『百濟』とともに衰退・消滅し、新たに列島内で『日本』という国家の枠組みが形作られていった。この時、天武天皇(大海人皇子)と一緒に働いたのが、多氏一族(神八井耳命を祖とする火君、大分の君、阿蘇の君、筑紫三家(みやけ)の連ら十九氏)と海人族(安曇、宗像氏ら)であったのだろう。



牧の原古墳群

(宮崎県都城市)

日向諸県君牛の娘髪長媛の像。一説には、宮崎県西都原古墳群の男狭穂塚、女狭穂塚を父娘の古墳とする説もあります。

モロカタの君も、ムナカタ、ミナカタ、オガタ氏らと同じ海人族(倭の水人)と思われる。